

## 近世に於ける學問の新傾向

吉田 三郎

### 序 言

現代に於ける史學の進歩にあつて特色あるものは、個々の歴史的事象が、歴史經過の全體に對して如何なる意義を持つものであるかを考へんとする點にある。歴史的發展の全體的經過の部分として、凡ての歴史事象を理解せんとするこの傾向は、歴史を全體的に且發展的に把握することを重要視するものと云へる。

近世なる時代區分は現代或は現代思潮をその萌芽的な形に於て育くみ培ひつゝあつた徳川氏の治世に該當するとする主張は、正に右の如き近時の傾向よりせられたるに他ならない。封建主義的節度の中に堅く閉ざさんとし、又とざしつゝある徳川時代の世相にうごめく資本主義的節度の萌芽は、自然主義的實證主義的思潮として、次第に、從來より來つた所謂封建主義的思潮に戰を挑みつゝあるは顯著な事實であつた。

委しく言はゞ、徳川時代を特徴付ける諸の事象、封建主義の日本的な完成、早期資本主義の擡頭、世

界的舞臺への餘儀なき登場、それと關聯するところ大なる我國に特殊なる町人の發達、右の社會的事  
情に相適ふ思想界の新舊要素の抗爭、これ等がやがて此時代を近世と斷せしめるものである。

それ故に近世に於ける學問の歴史的研究は右の如き社會の狀勢と、佛教、儒教、國學、皇學、自然科  
學の隆替との關係を見ることに於て意義ある譯であるが、これ等に關しては既に幾多の論述があり、  
その概説の如きは小論に企及すべくもない。従つて本稿に於ては已に研究せられたる近世の學問の隆  
替を既知の事柄とし、徳川時代の中後期に於て注目すべき學者數名を擧げてその學問の方法と、それ  
を支持する思想に新たな傾向あるを指摘し、従前の諸説を補足するに止めねばならぬ。

一

徳川時代の社會の本質に關しては種々の見解が見られるが、とまれ封建制度とするには何人も異説  
なきものゝ如く、特に集權的封建制度と云ひ、專制的國家となさざるまでも、少くとも、形式的には  
集權的な政治組織が見られ、それを持續せんが爲にあらゆる人爲的な試をしたことに特徴あることも  
亦疑なきところと云はざるを得ない。換言するならば徳川幕府成立の基礎事業に際し、非封建的なもの  
を採用したことあるも、武斷的政治を以て、織田豊臣兩氏治世の時急激に進展した自由にして進取的な  
諸の活動、それと歩を共にしこの時代にみなぎつた自由の精神の出鼻を挫き、封建主義的色彩濃き東  
縛を加へたことが重大な意味を有する。階級的節度の法制的樹立、儒學特に朱子學の獎勵、強要、頻

々として發布せられた奢侈禁止令、鎖國政策の採用、參覲交代等、この時代の史上に現はれる重要な事實にして、徳川氏治世のこの根本的方針の具現せられざるものはない。社會の自然な、或は自由な進展に逆行し、それをばんで現狀を維持せんとする政策がこの時代位多く企てられ、而も効果的であつた例は吾史上に類例を求め難い。明治大正の六十年を經過し更に昭和の今日に至るも尙封建主義的なものゝ方あるを見るにつけ、封建的束縛の徳川時代に於ける成功を今更の如く驚かざるを得ない。併しこのことの反面に、その束縛に抗しつゝ進むべき諸要素を許容したことが、又この時代の露はなる特色をなしてゐる。(註<sup>3</sup>)幕府自らを始めとし諸大名亦相競うて獎勵した鑛山業、商工業がそれであるが、その結果、都市の發達、町人の富裕、武士の困窮、浪人の増加、農民の離村等封建主義的節度を紊す現象が生じ、こゝに資本主義社會が準備せられつゝあつた。

資本主義社會の特色として學者の列擧するは、生産手段の私有、生産に於ける無統制、自由競争、營利的生産、勞働方の商品化等であつて、これ等と右の徳川時代の特色との關係を見るならば、後者が前者の前提條件であり、資本主義の萌芽が、已に、早期資本主義として發達しつゝあつたと云へる。何故ならば、鑛山業、商工業の發達、都市の發達等は貨幣財産集積の豫備條件となるものであり、資本主義的生産方法は、多くの人々の購買行爲を自己自身の購買行爲に集中せしめる商人を前提とし、商業資本が發達すれば交換價值を目的とする様になり、生産物をば益々商品化する様作用するからであ

る。又浪人の増加や農民の離村は、實は、共に資本主義的工業の成立を可能ならしめる一面をもつてゐるからである。

第一、第二のこの矛盾する二つの社會の趨勢に一定の方向を與へたのは所謂世界の大勢で、吾國がこの大勢に捲き込まれざるを得なかつたこともこの時代の重大な特色の一であり明治新政の成立を理解する最も重要な鍵であらう。即ち世界の大勢が、已に近代資本主義に移らんとし、外國貿易、植民地獲得の運動が國を鎖ざして平和の甘夢をむざぼつてゐた吾國をもその渦中に投入し統一國家の要望を無理矢理に喚起したことである。鎖國、開國、尊王攘夷の鬭争の歴史が遂に皇室中心主義を指導精神の如くにして明治新政府により一統せられるに至つた事情を理解するには、吾特殊なる國情をきはめると共に十九世紀に於ける世界の事情を攻究するを要する所以である。

吾徳川時代に於ける諸般の史實は如上の三つの特色によつて、織り成されてゐるのであつて、今述べんとする學問界の諸特色も亦これに相應するものがある。

(註1) 本庄榮次郎著 「日本社會史」

(註2) 福田徳三著 「日本經濟史論」

(註3) 西田直二郎著 「日本文化史序説」

## 二

中世精神の宗教的、彼岸的な方面を斥けて近世社會の成立と歩を同うして、合理主義、現世主義を精神文化に齎した儒教は、倫理的な根據付をすることによつて、封建主義社會の理論的永遠性を説くものであるとは直ちに考へられる處である。徳川幕府初政時代は前述の如く日本封建制度の完成した時であるが故に、儒教によつて最も合理的な永遠性が主張せられ、儒教は又、この完成した封建制度に於て、其理論の具體化せられたよき實證を得ることが出來た。儒教及び封建主義的經濟學が、徳川時代の中葉太宰春臺に於て、最高の發展整備せる體系の建設を完うしたのは其時代の社會の情勢に負ふ所大である。

併し泰平と云ひ昌平と云ふは、既にその他面に衰頹の始を意味し、時の衰を人々に感せしめる。前述の如く歴史を現實の人間社會生活の成果と見て、これにその學說の實證を求めんとする儒學者に取つて困難をまぬかれざる時期の到來は避くべからざる勢と云ふべく、新井白石(明曆三年—享保十年)の學問とその時代との關係に早くもかくの如きものを見る。即ち元祿、寶永、正徳、享保の頃には既に清の浸入を恐れる必要なく、江戸開幕の當初に盛となつた神道論も、學界を風靡せる如き支那崇拜の風調の影に没し、世は泰平を謳はれたが、その半面には反封建的要素の擡頭漸く著しいものがあつたのである。家康時代への復古を標語とした吉宗の武斷政治と相容れぬ白石の封建制度修正主義、或は文

治主義を支持する學問には後に述べる如く近代の學問の要素が認められるが、かくの如き學問が白石によつて樹立せられた理由は、勿論其天賦の聰明さに歸すべきこと多々あるは疑ないが、彼が封建制の社會の最盛期をやゝ過ぎた時代に生活し、赤穂義士事件によつて表はされるやうな、この封建的社會整理時代、合理化時代を直接に體驗するを餘儀なくせられたことにあるのも亦否定し得ないであらう。即ち自叙傳「折焚柴記」に見ゆる如く白石は身自ら浪人、藩士、幕吏、外交官たるを餘儀なくせられ、政治に外交にたづさはり、暇の身となつては其豊かな體驗に基いて思索し研究したのであつた。従つて彼の學問の領野は、政治、外交、歴史、地理、言語の各方面に互り、その識見の非凡、吾等の注目せざる能はざるもの多く、就中その研究法に於て新たなものあるを思ふ。正確なる事實を學び、それに立脚して論ずる點が第一の彼の學問上の特色であらう。

古史通或問に於て、今迄の吾國史に於て「是」とする處は何れも史書撰述の人の主觀に過ぎぬが白石自身はこれと趣を異にし「其事はすなはち實のみ、其義はすなはち正のみ好む所にありて曲げて説つくるべからず、即ち今録せし所のごときは舊事古事日本紀及び古語拾遺等の書に出し所にして其事實に近く其義やゝ正しきと見ゆる所を徴となし據となして解くべきものを解作り疑ふべきものをば疑を傳ふあへて私の言を容れず異端小説のごときに到つては斷じて是を採らないことを云ふ。けだし、實證的、考證的研究態度を示すに他ならない。又古代の神話的記述を一切人間の行爲として合理的に解

(註<sup>上</sup>)

釋せんとする白石の古代史に對する態度——今日の進歩したる民族學の見解からは極めて見るに足らぬけれども——も亦當時の學問界には斬新なるものと云ふべく、中世的な思想から近代的な思想への歩みをこゝに看取すべきであらう。彼の排佛、排基督教も同じくかゝる合理主義的なる學問態度の然らしめたところである。又武家が暴力を以て朝廷から政治を奪つたとする水戸學派に對し、白石は公武合體主義政治論を以て、その非なるを駁してゐるが、その論據は讀史餘論に見ゆる如く明かに歴史的事實の歸納によつて得たものであつた。

彼の歴史研究から目を轉じて更に各種の業績を見るに、こゝにも亦空理ではなく精密に調査せられた事實——考證せられた歴史的智慧、廣き見聞と該博な智識から得た地理的事情、風土風俗等——が所論の基礎をなす點を見逃し難い。「本朝軍器考」以下の多く考證的論著は云ふまでもなく、「五事略」其他の政治經濟論、「五十四郡考」「蝦夷志」「南島志」の如き地誌、「同文通考」「東音譜」「東雅」の如き言語學、文獻學的研究、外交史論なる「方策合編」等何れもこの例にもれるものではない。更に「西洋紀聞」「采覽異言」に計數を以て事實を見易からしめ、廣く智識を外國の事情に於て求めるを見るが、これは従前見る事の出来ない新しいもので、これ等によつても彼の學問の方法が窺はれる。

次に白石の思想を見るに「古記の文字に拘はらずして其義を語言の間に求め實に據て事を記して世の鑑戒を示す」(古史通)と云ふものが經史である故に、史論即社會觀、倫理觀、世界觀であるとなし得

る。處で、その云ふ所に従へば世界には東西古今を通ずる理があり其理法のまゝに吾々人間の歴史は發展經過する。而して儒教の立場から善と考へられる事をしたものには其一生に或は其子孫に幸が應報し、これに反し惡業を働いたものには禍が果すると云ふ。その理法を白石は天命或は天と稱した。(註<sup>2</sup>)これを以つて見れば、白石の學問の方法の進歩的なるにも拘はらず世界觀には中世的なものが未だ多分に存するとせねばならないが、其因果應報或は天命が善惡といふ儒教的倫理判斷と離れ難くある、即ち、歴史を人間世界に引戻した處に徳川時代的な特徴を充分に見ねばならぬ。

かくの如く白石の學問にはその研究法を支持する思想と、それと矛盾する世界觀の儼然と存する事實を覆ひ得ず、吾人はその矛盾に當惑せざるを得ないが、而も彼自らはこれを容易に解決し、その間何等の矛盾を意識せざるかに見える。

「彼方の學のごときは、たゞ形と器とに精しき事を、所謂形而下なるものゝみを知りて、形而上なるものは、いまだあづかり聞かず、されば天地のごときもこれを造れるものありといふこと怪しむにはたらず」(西洋紀聞)

として基督教の「荒誕淺陋辨するにたら」(西洋紀聞)ざる所以を説いてゐるに鑑み、白石が形而上の學問に於ては儒教的天命論に依るべく、形而下的、自然科学的智識に關する限り西洋の近代科學を正當とすべきであるとの二重眞理説に似た解決法を取つたことがわかる。



卑見を以てすれば、かくの如き矛盾の來る所以は、白石が儒教尙盛んな時代に成人し、儒教的な考を意識的に或は無意識的に腦裏に深く刻せられたこと、衰へ始めたとは云へ尙時代は封建主義的節度の崩壞を豫測するには至つて居らず、修正改良を要する程度に過ぎなかつたこと等に歸すべきであると考へる。批判的、實證的、考證的、歸納的或は又合理的の學問方法は儒教の現世主義の新展開及び時世に批判と修正の餘地を生じた結果と云ひ得べく、それ故にこれ等の新しい傾向は白石以前の世に つながらるよりはむしろ來るべき時により多く關はることあるを思ふのである。

(註1) 神は人なり。天の浮橋と曰「連海之戰艦」である。國土生成は土地開拓に他ならない。身一つにして面四つありと云ふは鳥の地勢其體面おのづから四つに分れたからである。八岐大蛇が一身八尾あると云ふは、一人で八谷八尾の地に據つたのを我國の文の體から斯く云つたのである。日本紀や古語拾遺に男女二柱の神が海・川・山等を生み給うたとあるのは心得られぬ等々從來「神道の不測」と云ふ一語によつて神秘的に解し去つた古代史の諸記述を人間行爲に還元し合理的に解かんとしてゐる。

(註2) 讀史餘論の所々に「天ノ應報アヤマタズト云フベシ」「天命ノ終ル姿ナリ」「天ノクミシ給ハヌナルベシ」「天ノ有道ニクミシ給フ所明ラケシトモ申スベシ」「天ノ御計ヒナルベシ」「天ノ方ニ蹶ク時ニシカク泄々スル事ナシト云事マコトナル哉」「汝ヨリ出テ汝ニ歸ルノ理トゾミエタル」等史實に對する倫理的判斷が加へられてゐる。

## 四

封建的社會節度は、白石の時代を経過した頃には、更に衰頹の姿を現じ、他面に、それだけまた所謂早期資本主義的社會が成熟しつゝあつた。三浦梅園はこの時代(享保九年—寛政二年)に現はれて、

時代の傾向をよくその學問に於て反映してゐる。まづ彼の著述「價原」に於ては、

「今金銀多ク諸貨ノ通利自由ナリシカバ、之ヲ都會ニ運ビ盡シテ舊穀新穀ニ及事不能、故ニ今控禦ノ權ヲトルモノハ有金ノ家コレヲ聚劔スレバ上下ノ財盡竭、是ヲ以テ名ハ諸侯米粟ヲ有スルモ其實ハ富商ニ併セラレテ云々」

と述べ、營利心の横溢、遊人の増加、人口の都會集中等の事實を指摘し、此等の弊を如何に矯正すべきやにつき論じてゐる。更に當時の學問界の狀勢如何にと云ふに、自然主義的な文學は愈々民衆にむかへられ、吉宗の學問獎勵、享保五年の洋書輸入の禁を緩めることなどあつて、數學、天文曆學、醫學、博物學の發達も顯著である。數學は延寶天和の交に關孝和が始めて純然たる日本數學即ち點竄術を發明して以來の進歩は著しく、安永天明の際に及んで安島直圓、藤田定資等輩出して斯界に劃期的な躍進振を示し、<sup>(註1)</sup>天文學界亦保井(澁川)春海、麻田剛立の天才を生み、醫學界にあつては山脇東洋出て漢法に一期を劃し、杉田玄白の「解體新書」翻譯の完成と共に蘭方亦隆盛に趨き、稻生若水、青木昆陽、野呂元丈の名が博物學界に表はれ、才人平賀源内は西洋物理學を知つた。麻田剛立と梅園との親交のあつたことは(歸山錄：梅園全集上卷)梅園學の中心をなすと考へられる自然科學的宇宙觀に大なる影響を與へたが、このことは、右の如き一世の學問上の風潮が深く梅園學と關聯せる一端を示すものであらう。

梅園は元來醫を業とする儒者であるが、白石より更に學問の領野は多方面に亙り、専門の醫學、生理

衛生學、經學を始め哲學、倫理、道德、宗教、教育、政治、經濟、天文、曆學、地理、歷史、語學、博物等諸般の學問に研究の手を擴げ遺す所の著書は三十餘種の多きに及んで居る。就中畢生の努力の結晶なる玄語、贅語、敢語の所謂「梅園三語」に於て主張せる條理學、及び世上之をアダムスミスの經濟學に比肩すと云ふ前掲經濟學說の「價原」は著名である。

三語その外各種の論著によつて梅園學成立の經過を窺ふに、彼は先づ一切のものに對して疑を抱き敢然として自然そのものに面し、一切の先入見を捨て去つて自然を直視して、そこに自然法則を發見せんとしたものである。一切を疑ふことをその哲學的思索の第一歩とした點、やがて彼が近世哲學の鼻祖デカルトに比せられる所以である。即ち「造物餘譚」(全集上卷)に

「總テ天地ニ達觀セントナラバ人ヲ棄、人ヲモ萬物ヲモ同ジフニ傍觀シテ而後人ニ得ベシ、天地ニ私ノ覆載ナク日月ニ私ノ照シ無シ」

と直截に學問に對する態度が披瀝せられてあるが、要は自然の客觀的認識によつて論ずることの正當さを云ふのである。

従つてこの書の理論が人體解剖、動植物の解剖、觀察の歸納、更には今日の物理學の初歩的實驗を證據とするのは、性理學に局躋せる一般の儒學者と趣を異にせる梅園の學問で不思議ではない。一例を示すに氣とは從來考へられた様な氣ではなく存在を實證し得るものであつた。

「水入を製するに二孔をうがつ、器に水なき時氣器にみつ、一勺の水入ば一勺の氣出云々」(造物餘譚)と物質の不可入性に關する初等物理學の實驗によりこれが説明をなしてゐる。

梅園の學問に今一つ顯著なる合理主義、排神祕主義は、青壯年時代天地間に條理を見出さんと天文學に專念し、更に各種の學問研究に於て石の如き自然科學的歸納法を深めた當然の歸結であらう。宗教的信念を嘲笑して修業の爲に身をさいなむ愚をそしり、其源を悉達太子の責に歸し、或は巫の言があたることの全く偶然なるを妊娠と祈禱に必然的な關係なき故を以て説明し、或は「心神恍惚なる時はいかなる事をもみさくべし」と幽靈に關する心理學的な見解を述べ、有馬山清涼院僧石丈の物語を例として佛教に云ふ天堂地獄は生前深い印象を受けた景色に他ならず、愚夫愚婦の非をなすを沮み善をなす道を開かんとした、「佛の方便」がかゝるものゝ存在を云ふのみとし、楠公が湊川の戦死の際、七度人間に生れ國賊を滅ぼさんと云つたと傳へられてゐるが、これは正成の言とは思はれない、恐らく筆者憤をもらす言であらう、等々、其の著「死生譚」には中世的な宗教思想を蟬脱して合理主義的立場に立つ彼の面目躍如たる多くの語がある。

以上は二三の例に過ぎないがかくの如き方法を以て眼に見、耳に聞き、膚に感ずる自然界の諸現象の間に存する法則——條理——を發見し、其條理を精神的方面にも擴充し、人事界の現象も亦自然の法則、條理をもつてすれば釋然たるものがあるとしたのであつた。即ち儒教的世界觀と自然科學的宇

宙觀との結合により梅園の條理學が完成せられる。

こゝに吾人は白石に比してより徹底した自然科学的方法を持し、自然尊重に於ても更に徹底せる梅園にあつて儒教が採用せられ儒教的な倫理觀を以て封建主義社會の永遠性が主張せられるに至つた理由を説明せねばならぬ。

梅園も白石と同じく儒學的空氣に成人し、その住む世界たる封建的社會節度の現在の事情は、假令改革の要ありとするも尙來るべき社會を豫見せしめるには至らず、従つて彼に取つては本來的の封建主義以外に自然状態を見出し得なかつたのであらう。「敢語」明善第二の冒頭には、

「已生我、親豈得不尊哉、已有我君豈得不尊哉。故天下之至尊君與父也、故子之奉父、臣之奉君天地之定分而不可易者也」

とあるが、この論法こそ其間の事情を彼自らに語るものであらう。

要するに梅園の思想、學問は當時劃時代的に進歩した自然科学、特に天文學に最大の信頼を置き其思想を擴充して儒教的の世界觀を理論的に完成したもので、そこにはよく當時の學問界、思想界ひいては社會の著しい特色が具現せられてゐる。梅園の高弟に帆足萬里出でて物理畫「窮理通」を著はし、かの寶曆明和事件の頃安藤昌益「自然眞營道」を物して直耕を尊重し、人爲的な規範に對して鋭い批難を

投げてゐることを思ひ合せるときこの頃の學問界の新傾向をよりよく理解することが出來よう。

#### 四

梅園にやゝ後れて世に出で時代の學問の新傾向を擔ふものとしては本居宣長（享保十五年—享和元年）と本多利明（延享元年—文政四年）の兩者を注意すべきであらう。宣長は古學運動の流に棹さし、加茂真淵、僧契沖の影響を受け、當時の自然主義的傾向の波に乘じ、卓抜なる考證學的、文獻學的方法によつて、我國の歴史事實を檢討し、判斷し、封建制度の内部的腐敗と、外國資本主義の壓迫に當面して益々國家的自覺を深め、極端なる尊内思想を以て國家意識の振興を企圖した。伊勢松坂に醫を業とし乍ら、傍ら師真淵の遺命を遵奉して不滅の名著古事記傳四十四卷を完成し、出藍の譽いやが上に高く、祕本玉櫛匣の著によつて時代の代表的經濟學者と謳はれた事實は已に周知に屬するが、その學問の方法に於ても亦非凡なるものがある。

「直毘靈」馭戎慨言の兩著は宣長の尊内思想の根據を説明するもので其結論の是非に關しては議論の餘地あるとしても、歴史的考證文獻學的の判斷は、まさに敬服すべきものがある。この初期の文獻學的方法が名著「古事記傳」に極められる迄彼の學問は日進月歩止るところなき有様であつたが、その間研究の態度は「玉勝間」に、

「凡て新たなる説を出すはいと大事なり。いく度もかへさひ思ひて、よく確かなるよりどころをと

らへ、何處までもゆきとほりて、違ふ所なく動くまじきにあらずば、たやすく出すまじきわざなり」とある如く、徒らに新奇の説を出すを誡め、あくまで實證的方法を重んずるを言ひ、又歸納的に確實さの透徹を期すべきを説いてゐるのであつて、若し歸納的に結論に達し難い場合は疑ひのまゝ保留し判断を後人に俟つをその常としてゐる。

更に例證を訓詁註釋に求めても眞淵とは論證の態度を異にして、易きより次第に難きに入り種々の用例から歸納したる極めて慎重なる結論を擧げ、獨斷や先入見からの演繹的歸結を排してゐることが目立つて見える。

従つて、かくの如き宣長の學問方法とは全然反對の立場にある儒教主義乃至は批判を缺いた盲目的支那崇拜、或は漢心は最も煩はしく、不自然、不當として、(註2)終始これに對して抗争を續けたのは當然のことであらう。己の住む時代に於ける此人爲的な窮屈さを厭ふ宣長の心に愛着を感せしめたものは、従つて自然そのものであつた。かくて自然への愛着と自然狀態の尊重はやがて彼の學問を一貫する特色をなすに至つたのである。物のあはれをそのまゝに書きなすものが小説であり、人情の自然を歌ふものが和歌であり、繪畫は宜しく寫實的であるべく、人間の本然の姿自然の姿は吾國上代人の自然的生活即ち惟神之道にありとする。契沖からうけた中古文學の精細な文獻學的考察、眞淵より引繼いだ古道の學即ち古代史研究、萬葉の理解は、かゝる自然を尊重する思想に基く宣長の古道説に發展して行つた。

文獻學的に考證せられた原始的な、従つて自然状態に近いとせられる古代人の数々の生活が、當時の社會の不自然さをかこち、窮屈さを厭うた(註3)宣長自身にとつて、合理的と考へられたことが復古主義を叫ばしめ古道説を唱へしめたと云ふべきであらう。

古傳説の物語る古代人の生活中、不可解な、或は認容しがたいところのものまでも、惟神の道と尊び、「神道の不可知」をもつて説明し終り、論理を超越させた點は、確かに現代人の論理、又はこれによつて立てる合理主義とは相容れぬに相違ないが、彼の學説に於けるこの矛盾を責むるに先立つて、彼によつて發展せられた客觀主義、實證主義或は文獻學的方法の偉大さを敬し、その學問にみなざる自然状態尊重の態度の意義を深く省察すべきであらう。

宣長の學問は、一方平田篤胤、南里有隣等の神道論者によつて一種の宗教に發展し、漸く近代的な學問の方法から遠ざかるが、他方文獻學的方法、客觀主義、實證主義、自然状態の愛好と尊重の態度、これ等は 所謂國學として發展し、それには、考證の歴史學者、國語學者乃至は古代制度の研究者なるよき後繼者を輩出せしめ、正常な近代的科學への道を歩み進めて來た。

(註1) 「まつたやすき事をいく度もかへさひ考へ、とひも明らかにてよくえたら、後こそかたきふしをば思ひかくべきわざなれ」

(玉勝間)

(註2) 「問をして道、知らんとなれば、づ漢心をきよくのぞき去るべし、から意の清くのぞこらぬほどは、いかに古書をよみて考へても、古への意は知りがたく、古のころを知らずでは、道は知りがたきわざになむ有ける。そも、道は、もと學



問をして知ることにあらず。生なまれながららのの眞まこと心こころなるる道みちにはは有あります。眞まこと心こころとは善よきくもああしくも生なまれなつつきたるままの心こころを云いふ。然しかるに後のちの世よの人は、おしなべてかの漢まこと心にのみうつりて、眞まこと心をばうしなひてたれば、今は學問せざれば、道みちをえ知らざるにこそあれ」(玉勝間)

尙儒教主義排撃は馭戎慨言、眞昆靈、玉勝間の「から人のおやのおもひに身をやつすこと」「富貴をねがはざるをよき事にする論ひ」「うはへをつくる世のならひ」「金銀はしからぬかほする事」等にも直截に述べられてゐる。

(註3) 「秘本玉匣」の著に於て社會の現状の打開につき縷々説くところあるも亦その間の事情を雄辯に説明せるものと考へられる。

(註4) 「からぶみの説は、いとかしこくは聞ゆれども人のさとりは限りしあれば、及ばぬところ有て、かの人のたくみをもて、人をつくらんとすれどもつひに作りうることをあたはざることあるが如くなるを。神代のつたへことはかの闇の内の塵の見るめははかなくおろかなれども、よく人を造りなすに同じきや。此ふたつを思ひわたして、神世の事どもの、うはへはなにのことわりありげもなく、はかなくおろかにきこゆれども、まことに人の智の及びがたくばかりがたき深きことわりのそなはりたることをさとりぬかしとぞ」(玉勝間)

## 六

數學者として、地理學者として、天文學者として、將た經濟學者として名高い本多利明は、既に記した如く宣長とは同時代の學者であるが、その頃は利明の言葉を藉るならば、「偶にも窮理を好む者あれば、異學異説の徒と名づけられ諸人に忌嫌はれる」如き状態を未だ脱せず、「心得あるも吾も人も黙して」(西域物語)窮理のことを口にせぬのが通常であつた。それ故所謂學者の態度を難じて、

「其心根より書籍を多く讀まざれば博覽の名を取難しと一圖に凝塊、時勢にも移り合ひがたきこと

も辨なく、片情張て卽詩文杯を手柄の様に覺え衆人を視下し、高慢胸外に洩れ衆人に忌嫌るなり、淺はかなる次第ならずや、思ふに學問の道はさにあるまじ」(西域物語)

と敢然云放つた彼の學問が、洋畫家司馬江漢等と同じく時流に異つたものであることを了解し得るであらう。

聖經を無用とし、讀經の聲を蛙の啼聲と聞き、神道の定則神祕にして愚民の擇には些しもならぬ(西域物語)と云ふ彼の學問の本旨とする所は、衆人に背かず、頑愚をもよく容れ、國家に益ある道を努め守るに外ならない(西域物語)ので、こゝに彼の國家意識、學問の客觀性に對する要求、學問の民衆化的傾向を窺ふことが出来る。さて學問が右の如き性質である爲には如何なる方法によるべきか。彼によれば學問は先づ窮理學から入るを捷徑とする(西域物語)が、この窮理學とは天地の學即ち天文曆數の學で、これに暗くては何一つわからない。而もこれを學ぶには數學、推步、測量の法から始めるのが順序である。(西域物語)言葉を換へるならば、學問の根本は數理、推步、測量にあると云ふに他ならぬ。

従つて、不便な支那文字を幾萬も記憶し、臆説杜撰な大明以前の書を解釋するに過ぎない様な漢學、儒學には素より賛同する筈はなく、精緻なる而も舊説になづまざる西洋學に信を置くは極めてあり得べきで、「天下ニ無敵」の歐羅巴の今日ある所以は、五六千年の歴史を省み、治道の根本を推し、自然と國家を豊饒にすべき道理を究て制度を建てたからである(西域物語)と斷じ、「算數ニ精シキ故天文曆

法測定ニ精ク渡海ノ法則ヲ詳ニシ大世界ノ大洋を渡海スルコト掌ヲ廻スガ如クであると言嘆してゐる。(經世秘策)僧侶、儒者、神道家等の治世論は、民をして佛を信せしめ神を敬せしめ聖人の教を守らしめ、以て封建制度の埒内に止らしめるにあり、商賈は賤しめられ農民は専心業を勵ましめられ、儉約と節欲を標語とするお上の命には絶對に従順なるべきをとく。然るに利明は制度を完備することを始め諸の物質的條件を具へることこそ統治策の第一條件であり、制度を布くに先立ち、先づ土地人民の地理的條件、關係、物産の状態に就いて計數的に精密なる調査をなすべきであると主張してゐる。換言すれば、前者の云ふ善政が所謂徳治であつて精神的なるもの無形なるもの——徳を施すを第一とするに反し、後者は物質的な養を全うすることを以て善政とする。西域物語に

「五常のいまだ萌さざる前に國の本あり、其國の本は則夫婦なり、其夫婦に子孫あり、是を善く養ふを以國の本が立つなり、其國の本の増殖に行支なく能養ひ遂る仕方あり、是を善政と云ふ」

とあるが、この善政の具體案が經世秘策に云ふところである。經世秘策とは、今日概念を以てすれば、國家的營利主義による富國策の謂で、その方法は國內の商業、工業、農業を國家が統制して適當な發展を遂げしめ、以て國內の物産を富饒にし、物價の平均を計り、人口増加の結果自然に膨脹する消費に應ずべくし、更 必需的に來る國內に於ける物産の人口に對する不足を、屬島の開拓、外國及び屬島との交易の利を以て補はんとするものである。經世秘策並補遺の記述には、先に述べた如く科學的方法

が各所に窺はれるが、彼が四大急務として熱心に主唱するものが焰硝の採出、諸金採鑛、船舶國有、屬島の開闢の四者であり、小急務とするところも新銅より金銀を絞取仕方、潮の滲鹽より焰硝を抜取仕方、家椀瓦を鑄鋳瓦に製する仕方、紙張障子を厚板玻璃障子に製作する仕方の研究、普及等日常生活に即せるものである。かくて、

「當時の國務に前勢あり、後勢あり、本首あり、末尾あり。此前後本末の首尾貫通して而後興業を企ざれば、決して成就せず、其本末首尾貫通は何に縁てか明白にせんとらば則ち算數を以て臺となし、天文地理渡海の道に透脱し、何一闕目なき様にせざれば物事に差支ることのみ多くて、何事も未遂で、相續することなりがたし……人道に預る器は度量衡秒の四器ありて事を決斷すること明白なり。是此工夫鍛鍊の道具なれば、算數を以て總根とし、此道具を用て、是を御し、人道正整するなるべし」(經世秘策)

と經世秘策の國務總論に云ふを見れば、利明の學説にあつて自然科学的方法が採用せられ、數學がその根柢をなし、これによりて善政を意圖してゐるといふ卑見が、必ずしも事實を誣ふるものではないことが明になると思ふ。

經世秘策に於て今一つ注目すべきは利明が封建的な束縛から世人を救ひ、自然の成長に任さうとした點であらう。即ち利明の善政は前述の如く自然の人口増加に順應して、それを養ひ育むことにあ

り、その人口増加の結果生ずる國內物産の不足の補充は商業の利益によつて、嚴密に云へば、國家的統制の下に行ふ外國貿易によつてなさるべしと云ふが、一つは人口の自然増加に加へられた封建主義的な不自然さ——所謂まびきの如き——から逃れて自然状態に復歸せんとする聲であり、他は又自然の趨勢として成長し行く商業經濟社會に對する封建主義的束縛を芟除せんとするものである。即ち利明も宣長とは異つた立場からではあるが、自然状態尊重の態度を表示してゐるので、兩者が現實の困難の解決を自然に順應することに求めようとした意味深い一致がある。けだし歴史的形成がその生命を失つて形骸のみとなつて存在するに至つて年月が久しく經過すると、人間の精神は常にその幾世紀間につけて來た塵埃から清淨にならむが爲に、恰かもかのアンタオイスが新鮮な力を求むる毎に常にその母なる土に觸れた如く、その永久不變の性の本質に遡つて水汲み、自然の古き原始的状態に復歸せんとする。(註1)即右の如き意味に於て、宣長や利明の自然状態を尊ぶ心には、改造的など云はんよりも寧ろ革新的な意義ありと云はねばならぬ。

人格圓滿性質穩健な宣長が、自然の姿を古代の生活に見出し、それを現實の規範にしようとして復古主義に陥つた如く、利明は又現實の外國勢力の壓迫と國內町人階級の擡頭に眩惑して封建社會を支持する農民階級の困窮に對する深き考慮を缺き、従つて論ずるところ進歩的なるにも拘はらず、現實の時勢に即した實際的對策となり得なかつたことは否定出來ない。しかし學問の發展、思想展開の事

實としてこれを觀るときは已述の如き意味は十分考へられる。

(註1) 村岡典嗣譯 近世哲學史 壹 (Vinderband, Geschichte der neueren Philosophie)

七

宣長の古道説を發展せしめた平田篤胤一派の宗教的神道論を、本多利明の開國貿易論の立場から考へ直したかの觀がある佐藤信淵(明和六年—喜永三年)は、また近世學問發展の上に當然取るべき位置をもつてゐる。信淵は若くして父を失ひ、故郷秋田を去つて江戸に出で、蘭學者宇田川玄隨から植物物産學を、井上仲、木村泰藏から天文、地理、曆算、測量の諸術を受け實證的な學問の正確さを夙くより會得した。(物價餘論及經濟要録)當時は已に洋學の我國に輸入せられること多く、和蘭書の譯述相次ぎ自然科學を始め西洋の諸科學が我學界に漸く勢力を張り來つた頃であつて、その後の彼の學究に少なからざる便宜を與へたに相違ない。又他面不安な社會——統一國家の要望が大となり、神道論が世人に注目せられたことは多くこれに起因するのであるが——を、殊に有名な天明の大饑饉を幼年時代に體驗したことも亦その學問的活動に大なる影響を與へないでは止まなかつたであらう。彼のカメラリス(註1)ト的學風と、現時唱へられてゐる國家社會主義的な學説は、(註2)かくの如き時世と彼の生涯が然らしめたところであることは異論なきものゝ如くである。

信淵の學問には荻生徂來、熊澤蕃山、太宰春臺等の儒學と經濟學説、その根本となつてゐる支那

の儒教並農政學說、本多利明の開國貿易論・天文・地理、間宮倫宗・伊能忠敬の天文地理測量學、平田篤胤の皇學の取入れられてあることは已に論斷せられたところであるが、(註3)かくの如き廣汎な領域にわたる雑多な學問を綜合して國家社會主義とも云ふべき學說を完成した點に彼の偉大さがあり、學說の發展する徑路に興味多く意味深きものあるを覺える。

更に云はゞ信淵學の體系には、王侯財産管理者の道をとくカメラリストの如く、理財學もあれば農學・工業學・鑛業學に關するものも含まれ、彼が最後に到達した學說に於ては、總て私的なものを排し、一切の經濟生活や國家の統制の下に樹立することがなされねばならずとし、從來の四民を廢し、政府官吏が直接これを管理し支配すべき本事、開物、製造、融通、陸軍、水軍の六府を置き、その下に草・鑛・匠・傭・舟・漁等職業別の八民を新に屬せしめ、租税を一切廢し、國家政策の費用は事業公營の利潤の一部によつて支辨し、生産資本も、一切の土地も、國有にせねばならぬ。(垂統秘録)(復古法)更に東京西京をつくり、關西、南海、中州、古志、陸奥の各地に治所を定め、軍備を充實し、産業を振興し、國家の實力を充分にし、かくの如くして中央集權の實が擧がつた曉には、滿洲を經略して支那の死命を制し、次に支那を一統したる後、大東洋軍を以つて歐洲を席卷せねばならぬ。これこそ吾日本の本來有する使命であると云ふ。この説は、宏漠たる經綸を説いて甚しく空想的とせられるけれども、尙ほ當時代の實際狀態に關して考案せられた意見であつて、これには明らかに國家社會主義的な學が發展

してゐるを見るのである。

處で今吾人の論點となるのは、右の如き學説は如何なる思想的根據に依るものなるかに係るものであるが、表面的には極めて神秘的なるが如くにして、而も本來然らざるものなるを承認せねばならない。

彼の宇宙觀を書表はした「天柱記」並「鎔造化育論」に於て、支那、天竺、厄勒祭亞、羅瑪、如德亞、阨日多の諸神を何れも吾國神の訛傳とし「皇祖天神の天地を造營し、人神を滋息するは、皆是れ天瓊戈の靈機に係る」(天柱記)ことを記録によつて證明せんとし、或は又、神を祭ることを治世の要素とし「伊勢兩大神の御領十二萬石と定め、且往古の諸例を校へ復して、日本總國二京十三省の國司に課して、各其土産を獻らしむべし」(混同秘策)と稱し、或は又世界一統の理由を述べて「皇大國は大地の最初に成れる國にして世界萬國の根本なり」と斷じ(混同秘策)哲人昇天説を唱へ、治者と被治者、八貴の現世にあるは神の意志である等と論じてゐるところは世の神道者流と撰ぶ所なきかの如くにも見える。

乍併周知の如く信淵學には學説上の發展があり、その前期のものに於てはかくの如きものはなく、所謂信淵の經濟學(即ち今日の概念では政治學政策學)は天文學地理學の實證的知識からなるを最も著しい特色としてゐるし、前記の如く彼の幼年期の學問はかくの如き彼の學問方法の極めて自然であることを思はしめるのである。又混同秘策に前述の如き神秘的な論述と共に、



「三台六府の政策も、三銃妙用の武備も共に完しと雖ども世界萬國の地理を講明して、其形勢の便宜に從て、節度處置を盡さざれば宇内混同の大業を成就すること能はず」

と云ふ如き科學的な論斷が隨所に見られ、中年時代の經濟學說にあつて樞要な部分をなした農政論に經濟の三要中第一に置かれる農政十三法の如きは、特に神秘主義に反するものである。それ故に彼を神秘主義者と見做すに先立ち今一應の考慮を要する。

當時勃興した平田篤胤を中心とする神道説の天地開闢論を自然科學的宇宙觀を以て合理的に説明し得ることを見出した時、信淵の演繹的神秘的な記述が始められたことは、信淵自ら天柱記の序に於て云ふ處であつて、このことが前記の疑を晴らすものゝ如く見える。

「抑皇國古傳記、雖有實證明可極尊信者、然亦荒唐如說夢」(鑄造化育論)

との彼の言葉こそは、その本心の物語られたもので、具體的な實證を得て合理的に説明し得る限り古傳によつたと云ふ自然科學的態度と神道學說との抱合の経過がこゝに示されてゐる。

吾古傳に見ゆる天瓊矛の天地開闢の神話的説明と自然科學的天地開闢説、天體運行説の類似が彼の「皇靈元運説」や「伊弉諾之私運説」を出ださしめたものであることは「天柱記」並「鑄造化育論」に眼を通す程のものは必ず承認するであらうが、この兩書の大部分が明かに吉雄俊藏譯の「遠西觀象圖説」の燒直しであることは右の如き解釋に對する絶大の支持であらねばならぬ。

例へば天地鎔造の妙機、即ち天文曆術の本原、萬物化育の基原であると云ふ所謂「産靈の元運」の四定例——凡そ生ずる者必ず其本物の外圍を旋る（旋回の定例）、凡そ分生する者は必ず其本物を中心として恒に西より東に運歩す（運動の定例）、凡そ本物を距ること遠き者は其行くこと速なり（遅速の定例）、凡そ分生する者は必ず其物の本體に从ふ（形體の定例）——の如きは今日の天文物理上より見れば語るに足らざるものであらうが、兎も角も天文觀測から得た天文物理の法則であつたに相違ない。

更に彼をして宇宙觀を我神道家の説に則つて表現せしめた第二の理由は、古事記の所載する二貴子生成の條にあるとすべき理がある。「凡禁夫婦之婚媾者必邪魔左道之教也、其以背天造之神意也」（鑿造化育論）と云ふ信淵にとつて自然現象即神意の表現であつたに相違なく、それ故吾古記に於て諸冊二神の貴子生成の寫實的記述が、己の信ずる自然科學的思想に反かざるを以て、特にこれを論じたものと見るべく、これによつても、彼が自然科學的宇宙觀の時勢に適應した叙述方法として、古神道説を採用したことの可能性を推察し得るであらう。同様のことは更に彼の經濟說中重要な部分が吾古代の神——少彥名——の意として記述し得ることを見出したことについて（天柱記）も云ひ得るところである。

（註1） 松崎藏之助「日本のかめらりすと」（國家學會雜誌）

（註2） 河上 肇「幕末の社會主義者佐藤信淵」（京都法學會雜誌）

羽仁五郎著「佐藤信淵に關する基礎的研究」

（註3） 羽仁五郎著「前掲書」

(註<sub>4</sub>) 同 右

## 八

以上五人の學者について徳川季世に於ける進歩的な學問の傾向を瞥見したが、特にこれ等の人々を擧げた理由は、偶々此等の人々に於て時代の學問の新傾向が最もよく代表せられてゐると見られるからであつた。換言するならば白石から信淵への發展が、やがて時代の學問の新たな展開の歩であることを云ひ得るとするのであるが、彼等に見られる新傾向はあたかも本論の冒頭に述べたこの頃の社會の傾向に相應するものあるを否定し難い。

徳川時代中期に於て封建的社會が完成し、やがてそれが崩壞したが、その社會的狀態は先づその完成を達成することを要求し、是に於て儒教の日本的な完成が見られ、その現世主義的傾向は近代學問の基礎を固めた。次いで封建的節度の行詰と崩壞の徴とは人々の心に物事の由來の發生的研究を不可避的に喚起し、他方資本主義的要素の優勢と、それに對する封建的な干渉と束縛は、この人爲的なものから解放せられんとする要求を自然の中に培はずはやまない。現世的合理主義的傾向、營利主義的數觀念の如きものが、この貨幣經濟的機構の發展によつて促進せられ、自然主義思想が考證學的文献學的な學問方法によつて、愈々堅實に進められ歸納的、實驗的なる結論が、從來の演繹的な獨斷に對して勝利を制し行くことは當然の趨勢と見られる。一人の學者が多くの學問の領野に研究の手を擴げた理

由の一つは論法の文獻學的であり、歸納的であり、幾多の資料を要求した結果であると斷論してよいと考へる。

又徳川時代に封建的束縛の力が絶大であつてよき効果を果したことは資本主義的精神の骨子たるべき自由主義と個人主義の發達を阻害し、資本主義的な政治論、經濟論の進歩を妨げ、將來の社會に對する具體的な展望を不可能に終らしめた。白石、梅園、宣長に全くこの事なく利明、信淵共に空想的にして具體的な點に缺くるところあるは、恐らくかくの如き理由を有するのであらう。この事は我明治維新の政治運動が盲目的であり前途に對する見通を缺きつゝ世界の大勢の渦に巻き込まれたと云ふことと關聯するところである。

徳川時代の右の國き國內的の事情に餘儀なき一定の方向を強要した世界の大勢は、思想界に國家的統一の要求を無理強ひにし、已に述べた如くにして漸く盛んとなつた歴史研究の結果と相互作用し、國家的意識を高め、吾國に特殊なる皇室のあらせられたこと、及び折から勢力の均衡を破らざらんとして互ひに相警めるに至つた歐米諸國の爭鬭といふ吾國に取つては極めて偶然的な幸福によつて、こゝに明治新政府の樹立を見るのであるが、この社會思想は又學問上に影響する處多く、學者何れも何等かの方途を以て國家的統一をなさんとし、學問全體に國家主義的色彩を帯びしめると云ふ新しい傾向を有してゐる。

織豊時代以來漸時侵入して我學問界特に自然科學界に劃期的な革新と躍進を與へたものが洋學であること又疑なく、こゝに近世に於ける學問の新傾向が、歐米諸國との關係に於て最も注目すべきものあるを承認せざるを得ないが、國學皇學の他の淵源が對支關係にも之を求め得べく、考證學、文獻學の方法の範が清朝の學問によつて指示せられ、それが洋學の容易に受納せられる基礎となつたことも覆はれぬ事實であつた。

かくて徳川時代に於ける學問の新傾向は、時代の新しい社會事情に鞭撻せられつゝ、從來の學問傳統や外來の既成學問を適宜に綜合することによつて生れたと云ふべきであるが、こゝに看過すべからざるは、此等の學問が沒我觀念、保守主義、主情主義、無批判的主觀的學問、續釋的獨斷によつて論をなす絶對主義等の如き所謂封建主義的精神、封建主義的學問の無力無意味さを學問的に明らかにし——かの幕末の複雑錯綜せる情勢の下にあつては直ちに政治的改革を指導すべき精神や理論となつて顯れなかつたけれども——以て來るべき時代の精神や學問の發展すべき基礎を固め道を清めると云ふ役目をなし、革新的な歴史的意義を擔うたことである。

新傾向荷擔者の階級、學派的に見たる新傾向等論すべくして未だ本稿に論せられざる點は多々あるがこれ等については他日大方の叱正を乞ふ心算である。